
続・僕と千影と時々オバケ

ヒメノムラサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・僕と千影と時々オバケ

【Zコード】

N2103M

【作者名】

ヒメノムラサキ

【あらすじ】

ある日浴室のドアを開けると見知らぬ力エルがいました。
そんな僕こと陽^{よう}と千影^{ちかげ}の怪異譚、まさかの続編。

やっぱり存外阿呆な内容なので要注意。

(前書き)

本作は同作者の短編『僕と千影と時々オバケ』の続編にあたります。

ある日のことです。湯浴みをしようと浴室のドアを開けるとカエルがいました。人間のような骨格に小学生ほどの背丈をしたカエルが、湯船に肩まで浸かっていました。

少年はドアを静かに閉めました。たとえこのドアを荒々しく閉めたところで、事態が好転しないことはわかつていたからです。そんなところに気を回せるくらいの冷静さが、少年には備わっています。しかし、その冷静さが返つて少年自身を苛立たせます。とりあえずひとつ風呂浴びて気分でも入れ換えるかと思い立ちましたが、その肝心の浴槽は見ず知らずのカエルに占拠されているという現実を思い出し、独り頭を抱えました。

ところで、皆様は『蛙の王さま』というグリム童話を存知でしょうか？『存知でない方のために要約致しますと、まずお姫様が泉にて一匹の蛙と出会い、ひょんなことからそこで蛙と友だちになるという口約を交わし、内心ではあんな蛙とお友だちになんてなつてやるもんですか！　ぷりぷり！　なんて思つていたお姫様だったのですが、経緯を聞いた王様に「約束はどんなことでも守らなければ駄目だ」と一喝され、蛙と食事を共にするだけならともかく、何故か明らかに友達の一線を越えているであろう「同衾」の申し出までこれまた何故かお姫様ではなく王様が了承！　してしまい、もうアンタらとはやつてられんわー！　と憤慨したお姫様が蛙を壁に叩きつけるとあら不思議、蛙は元の王子様の姿に戻り、物語は二人の結婚で幕を閉じるのでしたためたしめでたし　というお話です。

何故ここで何の前触れもなく『蛙の王さま』のお話が出てきたのでしょうか？　場面を風呂ジャックされた全裸の少年へと戻します。少年はよりもしない人の目線を気にし、とりあえずパンツだけは履くと居間に戻りました。独り暮らしであるにもかかわらず、トイレのドアに鍵を掛けてしまう人にはなんとなくわかる心境です。そ

して、テーブルの上にある携帯電話を手に取ると、思ひくはまだコンビニにいる彼女に電話を掛けました。ホール一回で出てくれました。驚異的な反応速度です。

「大変だ千影。風呂にクソでっかい力エルの化けモンがいる」

「あら、またですか。陽さま」

携帯電話越しに聞こえる彼女 千影の声色は平素通り澄ました

ものでした。その態度を少年 陽は大変心強く思います。

「えつと、今コンビニだよな？ あのウチ出てすぐの坂上つたところにある」

「ええ。……おっしゃっていた物以外で何か欲しいものでも？」

「いやいい。というか、いくら僕でも風呂に力エルの化け物がいるという事実を知らせたいだけで千影に電話したりしない」

それもそうですね、と千影が言います。多分声色には表わさずとも笑つているのだろうな、と陽は苦笑しました。

「しかし蛙ですか。もしかすると、それは河童ではないのでしょうか」

「河童？ 河童つてあの河童か？」

「ええ。陽さまのおっしゃる『あの』がどの河童を指しているのか、私には皆田見当もつきませんが」

「皆田わからないのはこっちだつて同じだよ。でも、河童つて……」

その、家ン中に出るもんなんのか？ 普通川とか沼なんかに出るだろ

「陽さまは鷹取運松庵のお話をご存知で？」

「ご存知ないよと陽はかぶりを振りました。話が長くなりそうな予感がしたので、椅子に腰を落ち着けました。

「要約すると運松庵の妻が廁で河童に尻を撫でられる話です」

落ち着け損でした。千影にしては存外簡潔な要約でした。向こうは公共の場というのもあるかもしませんが、しかし声量が変わった気配はありませんでした。それで「河童に尻を撫でられる」などと口走つてしているのですから、陽はその常識の欠如っぷりに一抹の不安を覚える一方で、この話を手早く終わらせなけれど心に誓いま

した。

「あー、でもそれは廁……トイレの話だら? カエルがいるのは風呂なんだよ」

「トイレには出られないから、水場繫がりでお風呂なのではないでしょ? うか?」

「……出られない?」

「一体どうして そういう話を返そうとしたところで、陽は言葉に詰まります。先客がいらっしゃいますからね、どこか悪戯っぽい千影の声が聞こえました。

「しかしあのジジイの守備範囲マジトイレだけなのかな。使えなさ過ぎだら?」

「トイレの神様ですからね。そういうものです」

両者ともに身もふたもない辛辣な意見でした。

ちなみにジジイの一件は、トイレの上に神棚という新しい「住居」を作り、そちらにジジイを封印もとい強制的に住まわせることで一応の解決を迎えました。ただ、千影がそこで「花を摘む」際には陽が神棚に暗幕を被せるようにしています。信仰心も何もあったもんじゃないかもしれません。

「ああ、まあ何だ。とりあえずカエルの詳細を今から教えるよ。まだ正体が河童だつて決まったわけじゃないし」

「ええ、よろしくお願ひします」

落ち着きはらつた声に混じる幽かな喜色。つい陽の眉間に皺が寄ります。

「なんか楽しそうだな……」

「いえ、そういうわけでは ただ、手馴れてきたな、と
手馴れてきた 電話をかける前、そして今も妙に冷静な自分の姿に、陽は苦笑します。

「そういう馴れば勘弁だな」

「ただ、やはり陽さまのおっしゃる通り、私は『樂しい』のかもしれません」

携帯電話の向こうで、小むく息を吸う音がしました。

「出でへる」ちは 陽さまのお傍にいらっしゃりますから」

それは どういう意味なのでしょう?

「え、自問自答するまでもなく、陽には千影の言いたいことがわかつっていました。その言葉に千影が込めた想いを汲みとつていました。しかし、そこで陽はありもしないもじもの話を想像します。もし、妖怪たちや神様 鬼神の類を見る眼が自分になかつたとしたら、はたして千影は今も自分の傍にいたのでしょうか? 傍にいてくれたのでしょうか?」

「陽さま……?」

千影の心配そうな声で、陽は我に帰りました。かぶりを振つて、これが表情や仕草を把握しづらい電話越しの会話であることを幸運に思いました。

「「ゴメン、何でもないんだ。……つていうか千影さん? 今いるのコソビーですよね?」

「ええ、コソビーです」

「そういう言葉は時と場所選んでくれ。そこ結構一人で行くんだからさ」

「では、一人きりのときなら構いませんか?」

「もはや家で一人だけの空間の方が少ないけどな。トイレにはジジイで風呂にはカエルだ」

まるで大家族ですね、と千影がこじらこじら笑います。完全に他人事です。見えぬ人間にはわからぬ苦労です。ただ、千影の場合ならたとえ観えていたところで同じことを言い出しそうだなと陽は思いました。そして、奇跡的に話が戻っていることに気が付きました。

「あーそうだそうだカエルだつたな。えーっとだな……」

言いながら、陽は再び浴室へと向かいいます。案の定カエルはそこにいました。浴槽ふちに両肘を置き、鼻歌めいたもの何ぞを我が物

顔で歌つておりました。苦い顔をした陽と眼が合います。カエルは鼻歌をぴたりと止めると、陽から顔を背け、まるで何事もなかつたかのように口許まで湯に漫かりました。

恥ずかしかつたのでしょつか。しかし、微塵も愛くるしいなどとは思いませんでした。

青緑色の体色に水かき、頭に皿こそありませんが河童に近い「何か」であることは見て取れます。

と、陽はそのカエルの正体を決定づける重要な特徴を発見し、思わず声を上げました。

「三本だ！ 足が三本ある！」

そう、そのカエルにはどうこつわけか足が三本生えていたのです。その時 千影が息を呑む氣配がしました。

「足が、三本？」

「ああ、足が三本だ。……つてどうした？ やつぱり河童じゃないのか？」

ただならぬ千影の反応に、陽も心なしか不安になつてきます。

「まさか ？」

「三ク？」

このカエルの名前でしょつか？ しかし陽には聞き覚えがありません。ただ、その名前が漢字一字でしかも常用漢字でないことはなんとなく察しが付きました。

「いいえ、何でもありません。……陽さま」

「ん？ ああ」

「今すぐそちらに参ります」

はあ？ と陽は素つ頓狂な声を上げました。

「いや待て待てどうしたんだよ急に！？ そんなにヤバいのかコイツ？」

「とにかく対処法については私が帰つてから検討致しましょ。それゆえ

「それゆえ？」

「それゆえ？」

「興味本位などから決して？については調べぬよう」

その念押しを最後に通話は切れました。かつてない程に真剣味を

帯びた、耳に残る声でした。

陽は通話を切り、その場に立ち去ります。あれほどに鬼気迫る千影の声を、陽はこれまで耳にしたことがなかつたからです。ゆつくりと例のカエルを見ました。

「お前、『ヨク』つていつのか」

幽かに震える声で陽は尋ねます。

カエルは相も変わらずふんぞり返つていましたが、流石にもう鼻歌を歌うのは止めたようでした。陽に顔を向け、重く低いどこか威厳のある声でこう返します。

「いかにも。余が？であるぞ父上」

妙でした。本来なら妖怪とは見るモノではなく感じるモノ。つまり視られること、形を定められることを忌避する傾向があります。形あること有限ならば、形なきことそれすなわち無限なり。姿を視られた拳句まして名前まで見抜かれようものならそれなりに自身を警戒してもいいはずつて、いやいやそうではなくて。妙なのはそこではなくて。本当の意味でひつかかるべき、問い合わせ箇所は

「ち、ちちうえ？」

「そうとも父上。どうした？ まさか父上は余が『成った』理由を知らぬのか？」

成った というのは、恐らく生まれたと同義なのでしょう。

「知るわけないだろ。ってか、お前何でそんなに平然としてるんだ。名前つていうのはお前らにとつてバレたら結構デカいものなんだろ

？ 何で動じない？」

「それは赤の他人 見ず知らずのヒトに見破られた際の話よ父上。とどのつまり我らはもう他人ではないのだよ父上」

もはや「父上」が語尾と化していました。語尾でキャラ付けに走る安易な萌えキャラのようです。

意味深な態度に、陽は思わず声を荒げました。

「赤の他人じやないって……どういうことだよ！？」

「よからう。教えようではないか父上。余が　？という物の怪に成るまでのその経緯を」

陽の脳裏を過ぎるある厭な予感。

もしかするとこのカエルは自分の「見える体质」と何かしら関係が

「？とは男女が水浴し、水中で『戯れた』際、その淫乱の気が変わって『成る』ものなのだ」

男女が水中でする戯れ　その「戯れ」が単なるキャラッキャラッウフフで済む類のそれでないことは、陽にも瞬時に理解できました。途端、顔が熱くなりました。はいそこ、顔以外のところも熱くなっちゃつたんじゃないの、とかそういうオヤジみたいなこと言わない。心当たりはありました。だつてお若い男女がひとつ屋根の下ですもの。猿かよお前らと地べたに睡を吐きたくなるくらいありました。千影がカエルの特徴を聞いて、かつてない程に取り乱していたのも納得がいきました。

ふと、定期的に風呂場でアグレッシブな男のソロ活動に励んでいたら、新しい生命の素^{いのち}が排水溝に溜まりに溜まって、見たこともないような生物風のモノが誕生しちゃつたよ、という某巨大掲示板のスレを思い出しました。あのときは確かパイプユニッショを使っていたはずです。このカエルもパイプユニッショを使えば、綺麗さっぱり消えて失くなるのでしょうか？

「これでわかつたろう父上？ 換言すれば　余は汝らことつて、まさに愛のけつ」

「ンなワケねえだろうがあああああああつ！…」

陽は喉が張り裂けんばかりに叫びながら、湯船に飛び込みました。それから自分の体を横に倒しつつ、カエルの右肩に自身の左手を乗せ、二つある内の股下の一つに右手を差し込みました。本来なら、このパワースラムと呼ばれる投げ技には相手の走つてくる勢いが大切なのですが、陽の火事場の馬鹿力にそんなものは不要でした。そのままカエルを前方回転させるように身を捻り、カエルを背中から床に叩き付け、全身を浴びせる 予定でした。ええ、予定でした。あいにく現実の浴槽はそこまで広くなかったのです。

カエルが背中から浴槽へと沈むよりも先に、前方回転の途中でカエルの頭頂部と壁が接触事故を起こしました。「きん」と地味で歎な音が響きました。除夜の鐘を鳴らす坊主を彷彿とさせる光景でした。ひと足早くやつてきた衝撃に、今まさに浮かんとしていた陽の足がもつれました。いざ危機的状況に陥ると人は返つて頭が冴えるもので。しかしその冴えが、この場に限つては陽の火事場の何とやらを奪つていく悪魔となりました。そのまま抱き上げたカエルの重さに押し潰されて、一人と一匹は仲良く浴槽の底へと沈みました。

千影がアパートに戻ると、陽は居間でテレビを観ていました。すでに寝巻に着替えていることと髪が濡れていることから察するに、入浴はとうに終えた様子でした。

千影は首を傾げます。一体浴槽のカエルはどうしたのでしょうか?

「あの陽さま……」

「ああ、お帰り千影。何か訊きたそうな顔してるな。カエルのことだろ?」

振り向いてそう言う陽に、千影は僅かに戸惑いながらも頷きます。

「あれね、三本足は僕の見間違いだつたみたい。あいつやつぱり河童だつたんだよ。で、ほら前に言つてたろ? 河童は仏飯 仏壇に供えられたご飯を嫌うつて。家に仏壇はなかつたからトイレのジジイで代用してさ。あのジジイの前でご飯一杯食うのは苦痛だつたけど、それでも食べ終えて浴室に入つたら、そのカエル僕を見た途

端一田散に逃げていったよ。神様と仏じや厳密には違つだらうナビ、
まあそこは神仏習合? つてことだ
まあいなくなつたからいいじゃないか、と陽は話を締め括りました。

いまひとつ納得のいかない千影でしたが、見えぬ体質である以上
見える陽がいないというのであれば、もう反論のしようはありません。

千影はレジ袋をテーブルに置き、居間を後にしようとします。や
の背中に、

「千影」

テレビに視線を止めたままの陽が声をかけました。
千影がなんでしょうか、と言つて振り返ります。

「トイレ使うときは暗幕忘れないようこ」

「……意外と嫉妬深いですね、陽さま」

「かもな。そのスジの奴に僕はとっくに憑かれてるのかも。それと

「

陽は、一端言葉を切りました。そして、頬を搔きながら続けました。

「じめん。今日はもう疲れたし、ホントのことは明日話すよ」

僅かに遅れて、そうですかという千影の返事。次いでドアの静か
に閉じる音が聞こえました。その声に確かに喜色が混じつているこ
とを、やはり陽の耳は聞き洩らしませんでした。

うーんと陽は座つたまま伸びをします。小気味良い背骨の音を聞
き、それからテーブルに突つ伏しました。レジ袋の中には自分が頬
んでおいたものもあるのですが、今はどつも手を付ける気が起きま
せん。溜息を吐いたあと、頬杖を突き、テレビ横の「空間」を視ま
した。結果、再びテーブルに突つ伏しました。

「意味が……わからん……」

思わず漏れるのは、呻くような声。

その「空間」には

「どうした父上。具合でも優れないのか？」

気品のある笑みを湛えたまま、陽にしか見えないアンティークな椅子とテーブルで、陽にしか見えないティーセットで優雅に紅茶を嗜む メルヒェンの世界から飛び出してきたかのような「王子さま」がいましたとさ。

(後書き)

家族がふえるよーー やせたね陽くん千影ちゃん！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2103m/>

続・僕と千影と時々オバケ

2011年7月5日03時18分発行